

黒川紀章メモリアル

共生のアジアへ

TOWARDS SYMBIOSIS OF ASIA



©Noboru Murata

水平線

青年達よ。

君達は

夢を見ているか。

水平線の彼方に

もう一つの水平線を見たか。

青年達よ。

君達はまだ

夢を見ているか。

宇宙の彼方の

星雲の中に

もう一人の君を見たか。

彗星の輝きに

自らを投影したか。

## 黒川さんの思い出

私が黒川さんにはじめてお会いしたのは1957年黒川さんが京大を卒業し、はじめて東京にいらした時です。当時はまだ日本では建築家の社会的立場が理解されておらず、大工さんと間違われる位でした。でも当時、原田康子さんという北海道の小説家が“挽歌”という小説をお書きになり、ベストセラーになりました。その主人公が建築家で、彼が当時の建築家の象徴T定規を抱えて白樺の林を歩く姿は、女性達の憧れの的となりました。それでやっと建築家という職業が皆に認められた時代でございました。その頃丹下が私に、「今度京都からすごく頭の良い人が来る。なんでも全学連の委員長をしていたそうさ。」と申しました。そして、その方が家に来ると聞いて、私はとてもドキドキしました。バリバリの全学連でアグレッシブな人が来るのかしら。それともすごい秀才で、女子供は近寄れないような寡黙な方だったらどうしようかしらなどと。黒川さんは、小田急に乗って成城の街を歩いて、あの成城の家の真ん中の階段を昇って、玄関に現れました。その時の光景はまだ私の脳裏に焼き付いておりますが、大きなT定規を左手に抱えて、首にはマフラーを巻いて、そしてにこっと私の方を見て笑いました。その姿を見て私は本当にホッとしたのを覚えております。その頃の丹下研究室は1つの頭脳集団で、沢山の本を読み、沢山の研究をし、沢山の設計をし、喧々諤々大変緊張した雰囲気であったと思います。しかしひとたび終わると、丹下の好きなワイワイガヤガヤが始まり、そういう時は私もお仲間に入れて貰えるので、一緒にワイワイガヤガヤ、それで黒川さんとも段々仲よくお話するようになりました。一緒にクリスマスパーティーの幹事をやって、色々な可笑しなことを考えて、皆さんを困らせたのを覚えております。あの方とお話すると本当に頭の回転が速くて、ウィットにとんでいて楽しいものでした。そして私はいつもこの方の頭は金平糖じゃないかと思っていました。あらゆる方向に触角が出ていて、それがあらゆる情報をキャッチする。それをあの明晰な頭脳と感性で分析し、忘れることのない記憶に叩き込む。本当に頭の良い方でした。

それからあの方は結婚し、かこちゃんが産まれて、そしてある日丹下が私に頼みがあると申すのです。黒川さんが辞めたいと言っているから、なんとか説き伏せてくれないだろうか。「え、私が」と思いましたが、成城の家に来ていただいて二人でゆっくり話し合ったのを覚えております。狭いところではなくて、広いところに飛びだしたいという黒川さんのお気持ちが良くわかって、私の力で気を変えていただくことは出来ませんでした。何て役立たずと丹下はがっかりしたことと思います。あの方をもう少しそばに置きたかった丹下の気持ちは本当によくわかります。

私が建築界と付き合いましてのは1970年万博の時まででございまして、その後は新聞紙上で皆様の御活躍を知って、とても嬉しく思っただけでございまして、黒川さんに関しては色々話題の多い方なので、時々どんな方と聞かれることがよくあります。そんなときどんなに偉くなるうとも世間で何と言われようとも、彼は私にとっ

ていつも懐かしい可愛い人ですとお返事しております。

2008年秋黒川紀章氏一周忌における 加藤敏子氏のスピーチより  
筆録/北村佳世

1980年に、黒川紀章、梅原猛両氏によって創設された「日本文化デザインフォーラム」は、33年間にわたり文化的視点から広義のデザインを考える活動を行い、各分野からのメッセージを発信し続けてきました。本年2013年は、その創設者のひとりである黒川紀章氏の7回忌にあたり「INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013」を氏の最後の設計になる「国立新美術館」との共催で開催するはこびとなりました。その意味深い場所で、氏が生涯のテーマとして取り組んだ「共生の思想」と、世界的な活躍の中でも、特に深い関心を持った地域であるアジアから、「共生のアジア」を主題に、大いに語り合う三日間にしたいと思います。ここから新たに生まれる何かを信じつつ。

一般社団法人 日本文化デザインフォーラム理事長 水野誠一

日本文化デザインフォーラムが再出発します。一般社団法人になったこのタイミングで新しい活動を開始します。その記念碑的イベントが「INTER DESIGN FORUM TOKYO 2013」です。日本の地方での開催から世界の地方、「東京」での開催にシフトし、一般市民への啓蒙的イベントから「知の収斂と拡大」へシフトし、「トーク」と「プレゼンテーション」を複合した新しい表現方法にシフトして、知の祭典が始まります。

一般社団法人 日本文化デザインフォーラム代表幹事 黒川雅之

今年は、国立新美術館を建築設計されました、日本を代表する建築家の一人、黒川紀章氏が亡くなられて7回忌を迎えます。当館は、国内はいうに及ばず世界の美術館の中でも有数の斬新で魅力的な建造物として高く評価されています。美術館は先ずその建物が美術品であるべきだという21世紀の美術館の最高のモデルの一つでもあるかと思えます。黒川紀章氏の業績とその影響を広く21世紀の世界とアジアの未来展望の中において、これからの建築と文化、思想と美術などの様々な分野における問題を取り上げ議論する場を、この度、日本文化デザインフォーラムと共同で設けることになりました。黒川紀章氏を偲びながら、故人が自ら示されたような自由で活発な議論が展開されることになれば、これほどの喜びはありません。

国立新美術館館長 青木 保

この度のフォーラムは、日本を代表する建築家黒川紀章氏の7回忌に因んで10月11日から13日迄の3日間「共生のアジアへ」という総合テーマの元に氏の晩年の代表作である六本木の国立新美術館において開催いたします。11日は“アジアの世紀”、12日は“思想と建築”、13日は“アートと美術館”。中国鄭州市の都市計画をはじめ、カザフスタンのアスターナ新首都計画などアジアの諸都市の都市計画を手がけ、メタポリズムや共生の思想といった日本発の新しい建築理念を生み出し、そして国立新美術館の設計にたずさわった黒川紀章氏の業績を振り返りながら未来に通じるテーマを抽出しています。この3日間で様々な分野の横断的な交流を生み、これからの世界に資する実りあるフォーラムになることを願っています。

一般社団法人 日本文化デザインフォーラム理事/INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013 実行委員会委員長 團 紀彦



## アジアの世紀

黒川紀章氏はアジアで多く仕事をされた。欧米中心の文化、経済の構造から、アジアが極めて重要な存在になって来ている。こうした中で改めてアジアを再考し地球規模でアジアの未来をプログラムしていく。

総合司会 マリ・クリスティーヌ (異文化コミュニケーター)

13:05 オープニングトーク「共生のアジアへ」

青木 保 (国立新美術館館長)

水野 誠一 (ソーシャルプロデューサー)

13:45 T&P「アジア1」ナビゲーター 山田真美 (作家)

① 宗教のアジア 中沢新一 (人類学者)

② アジアのアート 長谷川祐子 (東京都現代美術館チーフキュレーター)

③ アジアの美意識 黒川雅之 (建築家)

④ アジアの建築 遠藤秀平 (建築家)

⑤ アジアの音楽 千住 明 (作曲家)

15:30 ゲストレクチャー「共生のアジアへ Towards Symbiosis of Asia」

金光裕 (建築家・台湾) \*同時通訳付き

16:20 T&P「アジア2」ナビゲーター 中島信也 (CM演出家)

17:40 終了

⑥ アジアのファッション 藤巻幸大 (ブランディング・プロデューサー)

⑦ アジアとハピネス ペマ・ギャルポ (桐蔭横浜大学・大学院教授)

⑧ アジアと教育 秋尾晃正 (一般財団法人 民際センター理事長)

⑨ アジアの経済 波頭 亮 (経営コンサルタント)

18:00 黒川紀章メモリアルコンサート 会場:1階ロビー

17:40 開場

戸田弥生 (ヴァイオリン) 江島有希子 (ヴァイオリン)

19:00 大山平一郎 (ヴィオラ) 辻本 玲 (チェロ)

### オープニングパーティー「花数奇」

時間 18:30 (18:00受付)

会場 プラッスリー ポール・ボキューズ ミュゼ (3階)

一般入場料 3,000円



## 思想と建築 黒川紀章メモリアルデー

建築家として、都市計画家として、国際的に活躍した黒川紀章氏の命日にあたるこの日、氏の遺した建築と、それを上回るほどの思想の提言を振り返りながら、21世紀の建築、都市、その思想を捉え直す。

総合司会 蛭川有紀 (画家・女優)

13:05 キートーク「メタボリズムネクサス」

八東はじめ (建築家)

13:55 T&P「思想と建築1」ナビゲーター 榎本了壺 (クリエイティブディレクター)

① 黒川紀章とレクイエム 三枝成彰 (作曲家)

② メディアと建築 南後由和 (社会学者)

③ 子供と建築 手塚貴晴 (手塚建築研究所代表)

④ 原子構造モデル 鈴木エドワード (建築家)

15:10 スペシャルトーク「黒川紀章と丹下健三」

豊川斎赫 (建築史家)

16:00 T&P「思想と建築2」ナビゲーター 河原敏文 (CGディレクター)

17:30 終了

⑤ メタボリズムの時代 榎 文彦 (建築家)

⑥ メタボリズムと共生の思想 團 紀彦 (建築家)

⑦ 建築を流れる時間 宮本佳明 (建築家)

⑧ 思想と建築 竹山 聖 (建築家)

15:00 茶会「花数奇」会場:3階講堂前

平行開催

亭主 大谷宗裕 (裏千家)

10 / 13  
SUN

## アートと美術館

すでに美術館そのものがアートとなった。国立新美術館は、黒川紀章氏設計の日本におけるほぼ最後の公共施設となる。ここで、世界の新旧のアートを収蔵展示するだけではない、美術館とアートの新たな在り方を検証する。

総司会 團 紀彦 (建築家)

13:05 キーノートレクチャー「美術館の未来」

アーロン・ベツキー (シンシナティ美術館館長) \*同時通訳付き

14:05 T&P「アートと社会」ナビゲーター 日比野克彦 (アーティスト)

① 地域とアートワークショップ 日比野克彦 (アーティスト)

② メディアアートと美術館 宮島達男 (現代美術家)

③ NPOと展開するアートプロジェクト 森 司 (東京アートポイント計画ディレクター)

④ サウンド オブ 生け花

土佐尚子 (京都大学教授) 中津良平 (シンガポール国立大学教授)

⑤ 国立新美術館の設立

青木 保 (国立新美術館館長) 寺坂公雄 (日本芸術院会員)

15:45 シンポジウム「建築と美術館の未来」

キーノートーク 妹島和世 (建築家)

シンポジウム モデレーター 青木 保 (国立新美術館館長)

パネラー 浅田 彰 (京都造形芸術大学教授)

妹島和世 (建築家)

南 雄介 (国立新美術館副館長)

17:25 総括 黒川雅之 (建築家)

17:45 終了

### 夜楽塾 (18:30~)

日本文化デザインフォーラム (JIDF) メンバーと、ゲストやオーディエンスが、軽い食事やアルコールをいただきながら、膝を付き合わせて歓談するものです。

※会場は国立新美術館周辺で、15人から30人ほどの小さな集まりです。

※会費は3,000~5,000円程度。

詳しくは、JIDF facebook イベントページをご覧ください。 <https://www.facebook.com/jidf.net>

水野誠一塾 「先ずは日本から“否常識”のスズメ」水野誠一・遠山正道・坂井直樹・マエキタミヤコ

黒川雅之塾 「黒川紀章さんを語る」黒川雅之・團 紀彦・手塚貴晴・鈴木エドワード

日比野克彦塾 「六本木アートナイト」日比野克彦・森 司

榎本了壺塾 「ことばと女子力」榎本了壺・蛭川有紀・佐伯順子・芳賀直子

### 書物の中の思想の塔と最期のバサラ

「地獄の体験」と題したマニフェストのような短文で、仏教の思想から、現代はさまざまな地獄絵図であるにとらえたメタボリズム論がある。『黒川紀章の作品』(美術出版社・1970年)の冒頭に印されている。まるでランボオか、ロートレアモンのような怪奇哲学的一文である。遡る1960年、東京で開催される世界デザイン会議を前に、若手建築家たちが苦慮熟考の末構築した「メタボリズム」は、大きな西洋文明の時代の中で、「日本とは何か」を問いかける姿勢から始まったという。黒川紀章は『建築論Ⅱ』(鹿島出版社・1990年)村松貞次郎との対談「共生の時代へ」のなかでそれを証している。「メタボリズム」は、生物学用語の「新陳代謝」と訳されるが、その背景には仏教思想の「輪廻転生」が潜むデモーニッシュな思想でもあるのだ。

「捨てる」「こわす」という「地獄の体験」論で始まる『黒川紀章の仕事』を編集デザインしたのが、栗津潔である。その頃、栗津さんも自分の作品集『栗津潔デザイン図絵』を製作中で、私は大学を出て間もなくその仕事を手伝うようになった。黒川さんの姿を見かけたのも、原宿にあった栗津さんの事務所だった。小さな仕事場に黒川さんが現れた時、その風貌が安倍晴明のような狐目の超人的なオーラを発していた。口が裂けるほどに笑うのも印象的だった。栗津さんも負けず劣らずヨータのような妖怪振りで対応していた。

1980年、日本文化デザイン会議(のちに、フォーラムと改称)が立ち上がる。第1回横浜会議のテーマは「共生の時代へ」。議長が黒川紀章、栗津潔は幹事。この二人が長い間、日本文化デザインフォーラムを支えることになる。私は若手メンバーとして、使い走りのようにこのデザイン会議の仕事をずいぶんとした。1991年の島根会議では議長にも任ぜられた。

仏教思想家の椎尾弁匡は、「共生」の思想を積極的に説いた人である。椎尾氏は、黒川さんが6年間通われた東海学園の学園長であった。彼の仏教講話は、黒川さんの思想構築に大きな影響を与えたことになる。「共生」を、「ともいき」と発音されたという。「ともいきの思想」を、「共生の思想」に再構築したのが黒川さんだった。

2007年、国立新美術館オープニングの黒川紀章展に隣接する空間で、「黒川紀章キーワードドライブ」という展示とイベントのプロデュースもさせていただいた。黒川さんは沢山の建築物と同じぐらい、書物の中に思想の塔を立てている。「共生の思想」「カプセル概念」「花数寄」「道の文化」「ホモ・モーベンス」「中間領域」「唯識論」「メタボリズム」など、黒川哲学の重要なキーワードをテーマにおよそ2カ月展開した。その期間中に、都知事選立候補の表明があって大騒ぎとなった。公示1日目、駒沢公園で黒川さんの選挙カーを待った。真っ白な動く中銀タワーのようなクライスラーがやって来た。私が黒川さんに持参したものを手渡すと、黒川さんは拡声器で叫んだ。「みなさん、エノモトさんから四葉のクローバーをいただきました!勝ちます!」ぎゅっりと鉢に生えた四葉のクローバーは本物だったが、勝利に結びつけることは叶わなかった。知将黒川紀章はその最期、飄々とカブき、バサラしてサラバしていった。

メタボリズム以後

1960年に川添、菊竹、黒川、大高、横等建築家が中心となって、メタボリズムの運動を立ち上げてから既に半世紀を越す。この運動の特徴は、当時の他のユートピア運動と異なって少なくともその思想が現実の建築として実現した事である。

その後彼等はそれぞれの道を歩むがGlobalizationの時代の到来とともに再びその思想は脚光を浴びる事となる。

横は昨年発表した“漂うモダニズム”の中で2つのうねり、一つは建築に対するそれぞれの地域社会の特性、もう一つは共生のヒューマニズムに注目している。それは特にアジア圏に目を向けた時、黒川の唱える共生のアジアの思想に繋がってくるものがある。

建築家 横 文彦

お話その1

私は壁にケチャップで絵を描いていた。赤い色はケチャップで、白い色はマヨネーズで、緑は練りわさび、黄色は練りからしを使って壁に絵を描いていた。そこに黒川紀章さんがやってきた。そして壁にもたれかかった…。「あーー！」とそこにいた人たちは皆声を上げる。

この状況は通常ではない。基本的に間違っている点を挙げてみよう。

・ 変異点

①何故 絵の具でなく、ケチャップ・マヨネーズ・わさび・からし、で絵を描いているのか？

②何故 そこに黒川紀章さんが現れたのか？

③何故 壁にもたれたのか？

・ その答え

①絵の具が手元になかったけれど絵を描きたくなったので、その場にあるもので絵を描き始めた。

②お腹をすかした黒川紀章さんがレストランであるその場所に食事をしにきた。

③薄暗くて描いたばかりで絵の具？が乾いているかどうかはわからなかった。ましてそれがケチャップであるとは思っていないから、何気なく壁に寄りかかった。

・ 結果

黒川紀章さんのスーツの背中はケチャップまみれになった。

・ 反応

「いいね、すてきになった」

お話その2

私はお皿を並べていた。丸いお皿を100枚、1000枚並べて、大きな丸い形を作っていた、丸いお皿が3枚接すると、その間に隙間が出来た。その隙間にまた丸いお皿を並べていた。そこに黒川紀章さんが現れた。大きな丸いお皿の上を歩きながら、空を見上げながら、そこに寝そべった。

この状況は普通ではない。通常でないところを指摘してみよう。

・ 変異点

①何故 お皿を並べているのか？

②何故 黒川紀章さんが現れたのか？

③何故 そこで寝そべったのか？

・ その答え

①地球(宇宙)をつくろうとしていたから。

②地球(宇宙)の設計を黒川さんがしていたから。

③大きな地球(宇宙)を実感したかったから。

・ 結果

地球(宇宙)が出来た。

・ 反応

このお皿の名前をつけようと黒川さんが言った。と同時に「これは天水皿だ」と言った。「地球は宇宙の水を集める皿である、この皿の中に人は生活している。この皿は増殖し続ける。」と言った。と同時に「これは天水皿n乗だ」と言った。

ということで…

お話その1は1990年頃の地方での酒場での出来事である。お話その2は2005年頃の瀬戸での出来事である。黒川さんが出てくる思い出は、どこか非日常な状況がつきまとう。人間が持っている身体のサイズ、身体の感覚を増幅、延長、進化させてくれる感覚が今も私の身体に残っている。私にとって建築家というより身体表現者、生身黒川紀章の印象がある。200x年ころ、黒川さんと二人で飛行機に乗り、羽田空港に向かった。空港の荷物受け取り場で、地上係員が箱から預けた荷物を黒川さんにわたす。

1mほどの長いそのものは、厳重に扱われていた。二人でタクシーに乗り、新幹線乗り場までいく。ホームで黒川さんを見送った。笑顔でその長いものをしっかりと握りながら、手を振った。

この状況も日常的ではない。その長いものが日常的なものではないから。

その答えはまだ私は持ち得てはいない。

## The Age of Asia

For the western Pacific Rim, from Japan to Indonesia, ethnic and cultural diversity is much more complicated than for Europe despite having the same geographical span, which is our blessing. However, we should re-think and re-invent western concepts of “creativity” and “nationalism” in order to release Asia’s potential.

Creativity to most Asians is not only a personal gift, but also a collective treasure. Classical Chinese epics, like “Three Kingdoms”, "Water Margin", and "Journey to the West" were passed down orally by generations of storytellers until a master writer summed up with a genius stroke. Katsura Imperial Villa, developed through many ages, is Zen-perfect simply because it contains many generations of talents. Mr. Norihiko Dan’s design of Taoyuan international airport terminal I expansion is an unusual modern example, literally a stroke that brings an old building renewed life, and yet conforming to the principle of sustainability.

Modern nationalism is another Western concept that emphasizes division than cohesion. It gave birth to modern nations, but it also caused military conflicts and hatred globally while Asia is no exception, and it even affects our understanding of ancient history.

My historical novel "Dream of Chijido" is set around 400 AD, about a nomadic tribe called Murong, a Siberian Caucasian stock who was a formidable power in Northern China. Chinese history called this era with contempt by "Five Barbarians Tribes Sixteen Kingdoms (304 -439 AD)". However, although there were endless wars, there were also tremendous cultural exchanges, including the spread of Buddhism, and culminated in the Tang Dynasty, a cosmopolitan China embracing cultures from all around.

Chijido is a seven-pronged sword that is national treasure stored in Isonokami Jingu in Nara. According to historian Yasuko Kobayashi, this design motif originated from Murong tribe, then spread through northeast Asia and Japan. It is a proof that cultural flow and cosmopolitanism spirit knew no boundary and there was never a “pure” culture, which contributed to what we are today.

War against Wako, meaning Japanese pirates who infested the Southeast Chinese coast in around 1600 AD, has been described as honorary war against foreign threat; actually only ten percent Wako were Japanese mercenaries while others were Chinese coastal people who yearned for opportunities of the Age of Discovery. Ming Dynasty claimed sea bans and these people became smugglers, and then armed to become pirates. Government started long, exhausting wars to wipe them out and closed off the country.

It was the Continental China, who sought static order, could not tolerate an emerging maritime China that embraced dynamic opportunities and risks. But marine activities never stopped, and ironically it a was half-Chinese, half-Japanese general Konxinga born in Hirado who inherited pirate fleets and continued the Ming Dynasty lineage in Taiwan by driving out Dutch colonizers.

Taiwan itself contains many ironies and twisted fates, which can be witnessed in the Maruyama site for the Taipei City Museum. It is a small mound on the river bend, where aboriginal people have lived for thousands of years. Japanese colonizers built a Jingu, Taipei Zoo, and Meiji Bridge around here. During WWII, underground tunnels were built as bomb shelter and commanding center.

During Cold War, Chiang Kai-Shek and US military advisers used the tunnels for the same purposes. In recent years, Meiji Bridge was demolished for a bigger replacement, zoo was moved away but many random structures remain, mega highway structures fly over the hill and river, and concrete wall levee block the City from river.

Taiwanese aborigines, the Japanese, the Americans, and the Chinese all influenced and continued to “haunt” this little hill even today. In recent years Taiwan spent much energy for quest of identity; and we have to look inwardly as much as outwardly, and a culture is alive only because it keeps transforming.

The same condition applies to every Asian nation. As Nationalism is a channel to define who we are from the past; cosmopolitanism helps to re-invent ourselves, so that many similar and yet different cultures may co-exist in a truly symbiotic way.

Builder-Taiwan Gene Kwang-Yu King

## アジアの時代

環太平洋地域の西、すなわち日本からインドネシアまでの地域には多様な人種や文化が存在する。地理的にはヨーロッパとほぼ同等の距離だが、ヨーロッパよりも多様に富んでいるといえよう。

アジアは独自性や多様性に恵まれている地域である。そのアジアのポテンシャルを開放するためには、西洋の概念である「クリエイティビティ」や「ナショナリズム」を再考し、改革するべきだろう。多くのアジア人にとって、「クリエイティビティ」とは個々の才能ではなく、共有の財産ではないだろうか。中国の古典小説の「三国志演義」、「水滸伝」や「西遊記」などは人の口から口へ、世代を超えて伝えられてきた物語で、後に文豪によって小説になった。日本でも、長い年月を費やして建立された桂離宮は世代を超えた匠の技が活かされた完璧な禪の世界観を作り出している。また團紀彦氏による台北桃園国際空港第一ターミナルの拡張計画もまた、これまでの西洋中心のモダニズムとは違う手法を示す現代の事例である。古くなった建造物に新たな生命を吹き込みながらも、サステイナビリティの原理に適合している。

近代的ナショナリズムも西洋で創造された概念で、結合よりも分裂や相違を強調している。この考えは近代国家の誕生に貢献はしたが、同時にアジアを含む全世界で紛争や憎しみを生み出した。そして古代史の理解や解釈にも影響を及ぼしていると言えよう。

私の著書、「Dream of Chijido(七支刀の夢)」は西暦400年、騎馬民族系の一部族であった慕容氏を描いている。慕容氏は鮮卑系白色人種の家系で、中国北部で絶大な勢力を誇っていた氏族である。中国史によると、この時代は軽蔑を込めて「五胡十六国時代」(西暦304年から439年)と呼ばれている。しかしこの時代は終わりがなき戦争が続いたにも関わらず、仏教の普及など文化的な交流や統合が非常に活発に行われ、その後様々な文化を受け入れた世界主義的な唐王朝の礎ともなった。

七支刀とは国宝指定された七枝の剣で、現在は奈良県の石上神宮に保存されている。歴史家の小林恵子氏によると、剣のデザインモチーフは慕容氏一族に由来し、その後北東アジアと日本に伝えられたとされている。この例は国境を越えた文化の広がりやコスモポリタニズムの精神こそがアジアに影響を与えて今日の我々につながってきたのであり、混じりけのない純粋な文化などは存在しなかったことの証左でもある。倭寇は西暦1600年前後、中国大陸南東部沿岸において活動した日本の海賊、または侵攻者を意味する。倭寇との戦いは外国の脅威に対する名誉の戦いと中華世界では説明されているが、日本人の傭兵は後期倭寇のわずか一割にしか過ぎず、残りは海運貿易、特にポルトガルとの貿易を熱望していた沿岸部の中国人だった。明王朝の海禁政策によってこれらの中国人は密輸に手を染め、その後武器を手に入れて海賊となった。明朝と倭寇の戦いは長期化し、疲弊した明朝は国外の影響を断ち切るべく鎮国を行った。静的な秩序を求めた中国大陸は、動的な機会やリスクをとらえて新たに台頭した海洋性の中国を容認することができなかった。しかし海運活動は密かに続けられ、皮肉なことに海賊船を受け継いだのは平戸で生まれ、中国人の父と日本人の母の間に生まれた鄭成功。鄭成功は台湾を占拠していたオランダ人を追放し、台湾に明朝の筋筋を残した。台湾も多くの皮肉や紆余曲折の運命を辿っており、その歴史のモデルは台北市立美術館のある圓山で見ることができる。川の流れに沿ったこの丘は数千年もの間、先住民の住処であった。日本人の入植者は丘のそばに神宮を建て、動物園を開業し、明治橋を建設した。太平洋戦争中には、防空壕と司令部を兼ねた地下トンネルが掘られている。

東西冷戦時代には、トンネルは蒋介石とアメリカ軍部によって同じ目的で使われた。その後明治橋は取り壊され、代わりに大きな橋が架けられた。動物園も移転し、跡地には不揃いの建築物が多く残っている。丘の上には高速道路が張り巡らされ、コンクリートの土手が川の氾濫から台北市を守っている。台湾の先住民、オランダ人、日本人、アメリカ人、そして中国人による影響が現在の圓山を作り、圓山の歴史として残されている。近年、台湾は自らのアイデンティティの確立に多大なエネルギーを費やしている。我々は、世界に対してだけでなく、自らの内面にもしっかりと目を向ける必要がある。文化は変わることによってのみ、生き続けられるからだ。

アジアの全ての国にも同じことが言えるだろう。ナショナリズムは我々がどの様に過去から今日にいたったか、すなわち我々自身のアイデンティティを知るためのきっかけとなる。そしてコスモポリタニズムは自分たち自身の可能性の再発見に繋がっていくだろう。そうしたことを経てはじめて、幾多の共通性を持ちながら多様性を持った文化の真の共生が可能になるのではないか。

建築家・台湾 金光裕

## The Future Art Museum

Do we really still need art museums? In an era in which images flood us, and in which those images are of an ever higher and higher quality; at a time, moreover, in which the notion of the genius creator seems as antiquated as the history of great men, it would seem strange to continue to build or expand these mausoleums that turn selected artifacts by master makers into icons worthy of veneration.

I would argue that we nonetheless need and will continue to need art museums in the future. The modern art museum is above all else an institution that frames objects and images it guarantees are not only authentic, but that through their unique quality provide a transformative experience. Art museums let us see and know our world through the concentrated thing we call art. Art is and will be useless and beyond value, and absolutely central to knowing who and what we are in our world.

The art museum has to understand itself and change. It has to use the monumental qualities it has inherited in a manner that opens them up. This is a paradoxical task: the whole notion of the monument assumes a closed place where objects (or people) of great value remain stored in a housing that preserves eternal values beyond the vagaries of human existence. The standard art museum's temple front denotes its sacral nature, its broad steps or remove from the city isolate it from its surroundings, its axial organization creates a hierarchy for the most important art, and its cellular lay-out makes for standardized, isolated chambers for concentrated viewing. This physical architecture extends through a mechanism of security, light and climate control, and image control that makes the art museum into a place to view dead things by dead people that only those with the power or wealth to enter are privileged to experience.

Nor do modernist boxes, with their massive concrete ramparts and icy glass walls hiding expanses of neutral space, improve much on this model. What we need instead are art museums that preserve the ability to enshrine the work of art in such a way that we realize its beauty and significance. We need art museums that take us away from the barrage of images that surround us all the time, remove us to another place, and there lets us, through the intense experience of that work of art, enter into a deeper knowledge about ourselves, our culture, and our world.

The future art museum will thus have to combine an iconic presence that signals the contents' importance with a branding effort that makes that necessarily enigmatic box as attractive as a pair of running shoes. It will have to adopt the most advance retail science, not in order to sell something, but to open you up to an experience. It will have to thus develop a path that entices and at the same time puts you in the frame of mind in which you can truly see the work of art. It must be a cross between a cathedral and a shopping mall.

If the future art museum is going to be effective, it must gather as much information as possible about the art it houses and shows. It then must make that information available in a variety of media, from the Internet and social media to interactive displays within the museum. It must do so in a manner that enhances, rather than distracting from, the viewing of the art.

Finally, I believe that more and more art will have the quality of being a gathering together of existing forms, images, and materials. It will be an assembly rather than a creation. Art is more and more a representation, rather than an invention. In addition, art also combines and integrates technology and the work of the hand and eye in a manner that affirms our nature as human beings who see, know, make, and remake the world around us. I believe the architecture of the future art museum must have the same character. It must be the gathering together of what is around it into a box of wonders that houses something amazing.

Director of the Cincinnati Art Museum **Aaron Betsky**

## 美術館の未来

現在、我々はイメージが氾濫しそのイメージの品質が飛躍的な向上を遂げる時代に生きている。伝記の世界の偉人のように、天才クリエイターという考えそのものが時代遅れになりつつある現代において、美術館は今後とも必要なのだろうか。

厳選された巨匠の美術作品を集めては尊敬の対象となる偶像を世に送りだすモソリアムを建設し続けるのは一見奇妙なことにも見える。

しかしそれでも私の考えは、美術館は未来にとって必要なものだと思う。特にモダンアートの美術館では、本物とは何かを見せてくれるだけではなく、価値観を変えるような経験を与える場所でもあるのだ。美術館は我々が「アート」と呼ぶ凝縮されたオブジェクトを通じて、自らが住む世界を見たり、学んだりする場所だ。アート自体は実用性のないもので価値をつけられないものだが、アートを通じて人々は実世界における自らの姿や存在意義を認識することができる。

美術館側も自らの存在意義を理解し変わっていかねばならない。過去から受け継いだモニュメント性をいかに発揮しながら、同時に外に向かっては開放していかねばならない。これは大変矛盾に満ちたことでもある。というのはモニュメントとしての美術館という概念自体が本来は価値の高いオブジェクトや人間の業績を閉鎖した場所に閉じ込めて気まぐれな人間の手の届かぬ場所に置いて永遠の価値を保とうとするものだからだ。このために多くの美術館は神殿のような構えや大階段を正面に持っていたり、周辺の街の喧騒から切り離そうとしたりするのである。あるいは対称軸を用いて、重要な美術作品を中央に並べたり、細胞のように細分化した部屋を作っては来館者が集中して美術作品の鑑賞ができるような環境を作り出している。こうして実際の美術館建築は、万全のセキュリティーを備えて外界の気候や光をコントロールするだけでなく、死者の作り出した遺物を富豪と権力者しか見ることが出来ないような場所にイメージをも変換しているのである。

このことはニュートラルで白一色の中身をマッシヴなコンクリートの城壁のような壁や氷のようなガラスの皮膜が覆っているような箱型の現代建築であっても、同じ考え方のモデルの上に成り立っている。美術館に今求められているのは建築様式の違いではなく、美術作品の美しさや大切さを認識できるようにアートを祭り上げる能力を兼ね備えているかということなのだ。日々の生活に溢れ返っているイメージから遠ざけて、日常から離れた場所でアート作品を強烈に体験し、人間や文化、さらには世界について理解を深めさせてくれる美術館こそ、今日そして今後求められる美術館の姿ではないか。

美術館の未来は、美術館がコンテンツの重要性を暗示する象徴的な存在になることと、あたかもスニーカーのブランディングを行うのと同様に、建築を謎めいていて魅力的な容器にすることができるかどうかにかかっている。そのためには最先端のリテール・サイエンスを採用することが必要となる。それは物品を売るためではなく、美術館における体験を開放するためだ。来場者にとって魅力的であると同時に、人々にアート作品と真剣に向き合えるような心構えを作り出す道筋が必要となる。美術館は大聖堂(カテドラル)とショッピング・モールの交差するところにあるものだと思う。

未来の美術館が本来の効果を発揮するためには、保管・展示されているアート作品についての情報をできる限り収集する必要がある。そして集めた情報をインターネット、ソーシャル・メディア、インタラクティブな展示等、様々なメディアを通じて美術館内で公開する。情報はあくまでもアート鑑賞という体験を強化するためのもので、来場者の注意や関心をそらすものではあってならない。

最後に、アートは今後ますます既存のフォルム、イメージや素材の集合という特性を備えていくと信じている。創造(クリエイション)から組み立て(アセンブリー)へ、そして発明から表現へと進化していくのではないだろうか。また、アートはテクノロジーと人の手や目を使った作品を組み合わせ、統合し、世界を見聞きし、作り出し、再構築するという人間の性質を再確認させてくれるだろう。未来の美術館のアーキテクチャーも、同様でなければならないと思う。未来の美術館は周囲の作品を収集し、それを驚きや感動を呼ぶ作品に昇華させる神秘的な箱としての宿命を担って存在しつづけることを確信している。

シンシナティ美術館館長 **アーロン・ベツキー**



一般社団法人

## 日本文化デザインフォーラム

### 【個人会員】

#### 赤池 学

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所  
代表取締役所長

#### 鏡リュウジ

古星術研究家／翻訳家

#### 坂井直樹

㈱ウォーターデザイン取締役／  
コンセプター

#### 佃 一可

一茶庵家元十四世

#### 八谷和彦

メディアアーティスト

#### 宮城 聰

財団法人静岡県舞台芸術センター  
芸術総監督

#### 井口典夫

都市プロデューサー／青山学院大学教授

#### 勝井三雄

グラフィックデザイナー

#### 桜井博志

旭造株式会社 社長

#### 手塚貴晴

手塚建築研究所代表／  
東京都市大学教授

#### 蜂谷宗苾

志野流香道第二十一代目家元後継者

#### 宮本佳明

建築家／大阪市立大学大学院 教授

#### 石井リーサ明理

照明デザイナー

#### 加納寛二

染織デザイナー／  
(株)スコープココ代表取締役

#### 佐藤可士和

アートディレクター／  
クリエイティブディレクター

#### 寺門孝之

画家／神戸芸術工科大学教授

#### 服部譲二

指揮者／ヴァイオリニスト

#### 宮本倫明(リンメイ)

「美し国おこし・三重」総合プロデューサー／  
(社)日本イベント産業振興協会理事／  
Landa Associates代表

#### 石鍋壽寛

公益社団法人観音崎自然博物館 館長  
環境省希少野生動物保護分科会委員  
(ミヤタナゴ)

#### 香山リカ

精神科医／立教大学教授

#### 佐藤 卓

グラフィックデザイナー

#### 遠山正道

株式会社スマイルズ代表取締役社長

#### 服部幸應

服部栄養専門学校 校長

#### 茂木健一郎

脳科学者／ソニーコンピュータサイエンス  
研究所シニアリサーチャー

#### 稲本健一

(株)ゼットン代表取締役

#### 川島蓉子

伊藤忠ファッションシステム株式会社  
新規プロジェクト開発室長

#### 庄野泰子

音環境デザイナー

#### 土佐尚子

メディアアーティスト／京都大学教授

#### 波頭 亮

経営コンサルタント

#### 森 司

東京アートポイント計画ディレクター

#### 猪子寿之

チームラボ代表

#### 河原敏文

CGディレクター／プロデューサー

#### しりあがり寿

漫画家

#### 戸恒浩人

有限会社シリウスライティングオフィス  
代表取締役

#### 速水 亨

速水林業代表

#### 森本千絵

アートディレクター

#### 梅原 猛

哲学者／国際日本文化研究センター顧問

#### 岸本周平

衆議院議員

#### ジャグモハン スワミダス チャンドラニ

ジャパン・ビジネス・サービス株式会社  
代表取締役

#### 泊 三夫

(株)博報堂 顧問

#### 原島 博

東京大学名誉教授

#### やすみりえ

川柳卯作家

#### 榎本了壹

㈱アタマトテ・インターナショナル代表／  
京都造形芸術大学教授

#### 北本正孟

株式会社カントリー代表取締役

#### 千住 明

作曲家

#### 富田 勝

慶應義塾大学先端生命科学研究所 所長  
慶應義塾大学環境情報学部教授

#### 日比野克彦

アーティスト／東京藝術大学美術  
学部先端芸術表現科 教授

#### 箭内道彦

クリエイティブディレクター

#### エバレットブラウン

写真家／ブラウンスフィールド代表

#### 北山孝雄

プロデューサー／北山創造研究所 代表

#### 千住 博

京都造形芸術大学学長／日本画家

#### 名嘉睦稔

版画家

#### 廣瀬通孝

東京大学教授

#### 山岡 茂

グラフィックデザイナー

#### 遠藤秀平

建築家／神戸大学大学院教授

#### 熊倉純子

東京藝術大学教授(音楽環境創造科)

#### 曾我部昌史

神奈川大学教授／みかんぐみ共同主宰

#### 中島信也

CMディレクター／  
㈱東北新社 取締役専務執行役員

#### 藤脇慎吾

グラフィックデザイナー

#### 山下保博

株式会社アトリエ／  
天工人代表取締役

#### 大江 匡

㈱ブランテックアソシエイツ代表取締役会長  
兼社長／建築家

#### 黒川かこ

㈱黒川建築研究所

#### 園山真希絵

(株)マキート代表取締役／食プロデューサー

#### 中谷正人

建築ジャーナリスト／千葉大学客員教授

#### ベマ・ギヤルポ

桐蔭横浜大学／大学院教授 政治学博士

#### 山口源兵衛

菅田屋源兵衛㈱代表取締役

#### 大須賀勇

舞踏家／俳優／振付家／演出家／  
大須賀勇ダンスオペラ主宰

#### 黒川雅之

建築家／プロダクトデザイナー

#### 高木和郎

プロデューサー／コンセプター

#### 中津良平

シンガポール国立大学教授  
インタラクティブ&デジタルメディア  
研究所所長

#### 堀木エリ子

和紙ディレクター

#### 山口令子

気功家／ジャーナリスト

#### 大谷宗裕(裕巳)

英千家調査役(株)日美 代表(取)社長/  
(株)ミリエム 代表(取)社長/NPO法人  
和の学校専務理事

#### 黒川未来夫

㈱黒川紀章建築都市設計事務所  
代表取締役

#### 竹中直純

株式会社ディジティ・ミニミ代表取締役

#### 永井一史

アートディレクター

#### マエキタミヤコ

サステナ代表 コピーライター/  
クリエイティブディレクター

#### 山田真美

作家／明治学院大学特命教授

#### 大樋年雄

陶芸家／デザイナー/  
ロチェスター工科大学客員教授

#### 小泉雅生

首都大学東京大学院都市環境科学研究所  
建築学域 教授／小泉アトリエ主宰

#### 龍村光峯

織物美術家／一般財団法人日本伝統織物  
研究所代表理事

#### 長友啓典

アートディレクター／イラストレーター

#### 松井冬子

画家 博士(美術)

#### 横川 潤

食評論家／立教大学准教授

#### 大森康宏

立命館大学映像学部教授/  
学部長／大学理事

#### 小山裕久

「音柳」主人

#### タナカノリユキ

アーティスト／クリエイティブディレクター/  
アートディレクター／映像ディレクター

#### 夏原晃子

造形デザイナー

#### 松島正之

ポストンコンサルティンググループ  
シニア・アドバイザー  
三井不動産株式会社 取締役(非常勤)

#### 吉村文彦

微生物生態学者／里山デザイナー/  
マツケアドヴァイザー

#### 岡田武史

サッカー日本代表前監督

#### 近藤高弘

陶芸／美術作家

#### 谷山雅計

コピーライター／クリエイティブディレクター

#### 蜷川有紀

女優／画家

#### 松平定知

京都造形芸術大学教授

#### 若林広幸

建築家

#### 小笠原敬承齋

小笠原流礼法宗家

#### サエキけんぞう

プロデューサー／作詞家

#### 團 紀彦

建築家

#### 芳賀直子

舞踊研究家／兵庫県立芸術文化センター  
薄井憲二バレエコレクション キュレーター

#### マリ・クリスティース

異文化コミュニケーター

#### 渡辺幸裕

プロデューサー・ギリークラブ主宰

#### 小黒一三

月刊ソトコト編集長

#### 佐伯順子

同志社大学大学院教授

#### 千葉麗子

㈱チェリーベイブ代表取締役

#### 畑 祥雄

写真家／関西学院大学総合政策学部  
メディア情報学科教授

#### 水野誠一

ソーシャルプロデューサー

### 【法人会員】

株式会社 博報堂

INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013  
黒川紀章メモリアル「共生のアジアへ」TOWARDS SYMBIOSIS OF ASIA

日時 2013年10月11日(金) 12H(土) 13H(日)  
会場 国立新美術館 3階講堂  
主催 一般社団法人 日本文化デザインフォーラム  
国立新美術館  
協賛 株式会社 博報堂  
株式会社 AOI Pro.  
株式会社 丹青社  
大日本印刷 株式会社  
株式会社 テー・オー・ダブリュー  
株式会社 ティー・ワイ・オー  
株式会社 東北新社  
凸版印刷 株式会社  
株式会社 乃村工藝社  
感動創造研究所

INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013 実行委員会

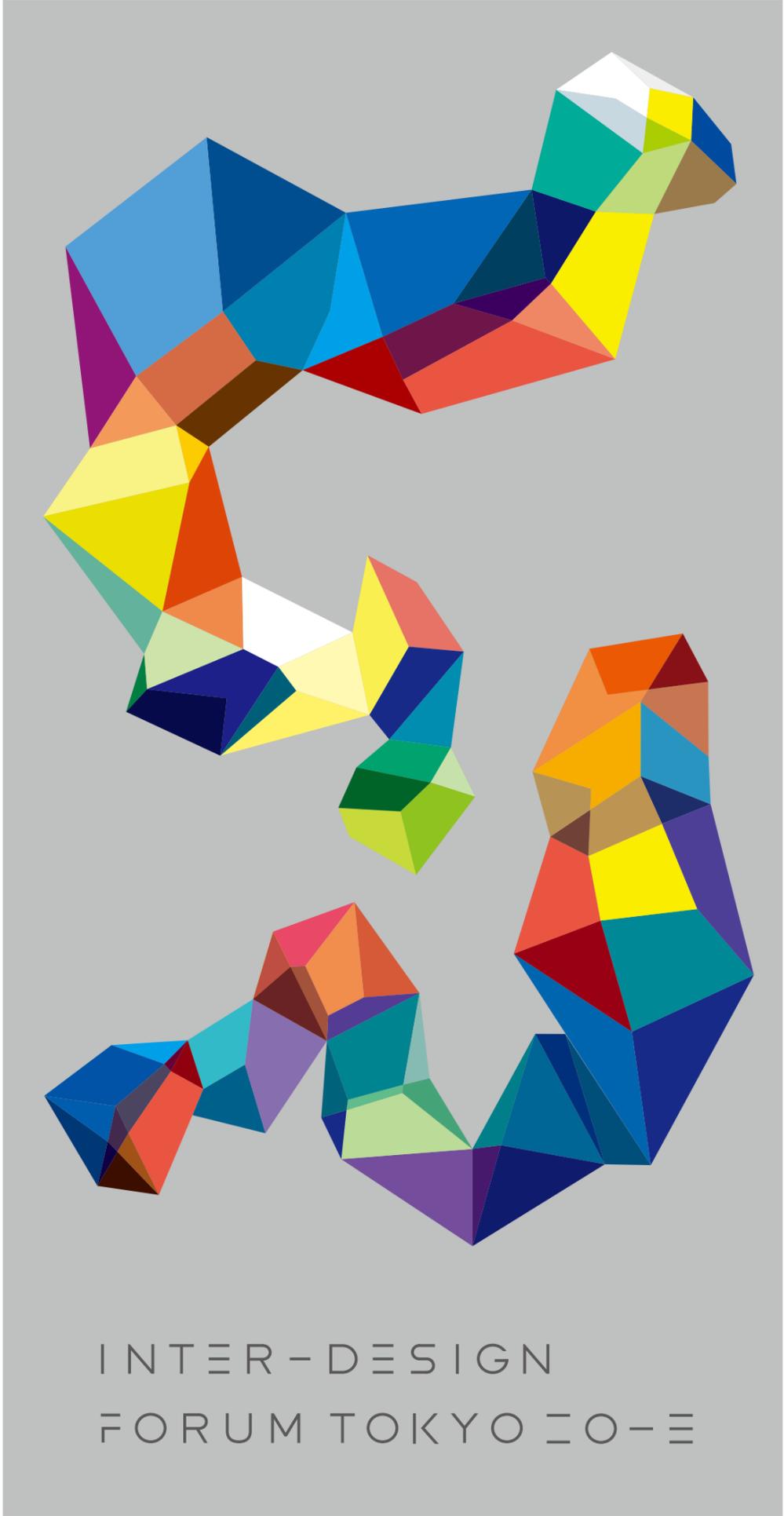
委員長 團 紀彦  
委員 榎本了亮  
中島信也  
永井一史  
蛭川有紀  
日比野克彦

総括 黒川雅之

国立新美術館 西野華子  
吉澤菜摘  
井上絵美子  
木内祐子  
水野元洋  
中川健太郎

JIDF事務局 長崎 保

デザイン HAKUHODO DESIGN  
印刷 凸版印刷 株式会社  
発行人 INTER-DESIGN FORUM TOKYO 2013 実行委員会  
発行日 2013年10月11日



INTER-DESIGN  
FORUM TOKYO 2013

